様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２２２

研究課題名（和文）日本とアジアの魂魄観についての比較思想史的研究-災気と人神の関係から考える-

研究課題名（英文）A Comparative Study on the Thought of Kompaku(soul and spirit) Outlook in Japan and Asia:Through the Analysis of the Relationship between Disaster and Hitogami (man-god)

研究代表者
佐藤　文子（SATO, Fumiko）

佛教大学・公私立大学の部局等・非常勤講師

研究者番号：８０４１１１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：儒教優位の社会では、生者が決定している規範秩序が強力な力を持つために、死者の格付けが生者の秩序に支配されてきた。そこでは生者が規定する観念に対応して女性においては未婚死が男性においては敗北死が、特別な扱いを要する不遇死（危険なたましい）と捉えられてきた。この研究ではこれらとの比較において日本社会にさまざまな変則が生じていることが判明した。日本では生者の秩序の影響力が緩やかであるために死者の人格を再編成する規則が成立せず、この欠落が生活や価値観など日本社会の思想全般に影響を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本の文化現象の歴史的展開をアジア文化のグラデーションのなかで捉え直すことで、従来日本固有とだけ説明されてきた事柄に具体的生成過程があることがあきらかになった。日本の宗教が第一義として〈死の様式〉であることは、西欧的宗教概念に照らして低く評価されてきた。しかしながらこれは、アジアにひろがる魂魄観を前提としながら、自分たちの社会の特性に応じて変容・発展し、現在にまで至ったものである。このことを洞察し的確に捉えていく作業は、こんにち異文化と共存しうる社会を実現するうえできわめて重要である。

研究成果の概要（英文）：In a society where Confucianism tends to dominate, the status of the dead has been ruled by the living because the decision of the living is superior. The people of that society have understood that the unmarried death of women and the war death of men are unfortunate deaths(harmful spirit) that require special treatment, according to the ideas that living people decide. Our research team, as a result of comparing them with the examples of their society, showed that various irregular phenomena occurred in Japanese society. In Japanese society, the influence of order by the living people was relatively modest. Therefore, the artificial rule to reorganize the personality of the dead did not hold. And this missing phenomenon is affecting the overall thought of Japanese society today, such as life culture and values.

研究分野：日本宗教史

キーワード：霊魂　固有信仰　死者供養　国際交流

１．研究開始当初の背景

日本の魂魄をめぐる観念は、アジア諸地域とのかかわりのなかで展開してきた、日本文化の具体的様相に切り込んでいくための突破口となる重要課題であり、かなめの問題である。ところがこれまでは、一国文化の内側からの研究が主流で、アジアを視野に入れた比較研究は立ち遅れてきた。その原因は、日本の魂魄観についての認識に、アプリオリに〈固有信仰論〉という思想が深く入り込んでいることにあった。

かつて、日本が国際社会で孤立にむかっていった 1937 年（昭和 12）、「歴史教授要目」が一新され、日本は古来「敬神崇祖」の国であったと教育されるようになった。前近代の日本社会においては、死者のたましいの取り扱いは、おおむね仏教者の担うところであり、死者の家族は、地獄に堕ちた死者を檀越活動（寄付による作善）によって救済（追善供養）する方法をとっていた。地獄という場が設定されていることで方法が具体化し、生者たちは観念上、仏教的回路を使って死者たちのたましいの行方をコントロールすることができた。

近代の大規模戦争が出した多量の戦争死者は宗教的には横死者である。戦争死者に対して仏教式の施餓鬼供養会が各地でさかんに催されたが、それは自分たちの大切な家族が、餓鬼道に堕ち、２００年間餓鬼としての苦しみにさいなまれつづけることを意味した。そのような時事的課題を抱えるなかにあって、柳田国男は、日本社会において死者は外来宗教である仏教によってではなく、故郷や家を基盤とする日本古来の祖先信仰によってフォローされるべきであるという国民的思想を形成した（1946）。また竹田聴洲は、仏教はたしかに外来のものであるが、日本仏教は日本的なるものであり、祖先信仰を体現してきたとし国内外に発信した（1950）。両者の説は、表層の立場が異なるものの、同じ課題に対する責任として発言されたものであることは明らかである。これらの説は、戦後の人々を戦時下以上に強力にスムーズに単一民族意識のなかに回収していく、宗教と名乗らない宗教として機能した。

他方、アジア世界の信仰習慣が日本地域の信仰習慣に深く関係していることについては、窪徳忠や増尾伸一郎らが学問的立場から基礎研究を手がけ、史上の実態を明らかにしてきた（1955・1985）。城隍神・土地神のアジア的広がりの実態、祖先信仰が仏教に取り込まれて輪廻のなかの過去世の父母への信仰になり、日本に輸入されアレンジされていく具体相の解明など、彼らの仕事は不朽のものである。しかし固有論や学問領域の縦割りに阻まれ、これらが議論される機会は極端に乏しいものであり、当該課題の研究の開始は切実に必要とされていた。

２．研究の目的

このような学問史をふまえて佐藤文子は、日本社会はアジア地域との比較において、死者を人格化して社会に再編入するシステムに欠落があるのではないかと考えるようになった。また、寿終死（天寿を全うした死）と横死（不遇死・異常死）との関係について、アジア地域に視野拡大して共通性と差異を慎重に観察を進めていくことが、日本の思想および文化の理解において不可欠な作業であることに気づいた。問題を明らかにするには、固有要素と外来要素の検出ではなく、アジア社会に複数の波紋として折り重なって動的に展開する文化グラデーションの観察をするべきなのである。

たとえば死者の人格化および社会編入の指南書ともいえる『朱子家礼』は、アジア世界に広く共有されすこしずつ異なったアレンジで応用されていることが判明しているが、日本社会ではこれがごく一部でしか受容された形跡がない。死者の人格化および社会的存在としての再編入の手続きに、長期間にわたって欠落があり、そのこと自体が基調となって次の展開の前提となっている。

日本社会では、だれがいつどのような死に方をする場合も、「死」という現象そのものを恐れ、それを遠ざけるかそれから遠ざかるか（忌・穢れ）、さもなくばそこに仏教的来世観を導入することで、困った事態を解決させる仕組みになっている。極楽はいうに及ばず、地獄についても、堕ちたという具体的イメージを経ることで、仏教者によって方法が明示された救済の回路へと導入されているのである。

こう考えると、死の穢観、臨終出家、死後戒名、在俗のままでの出家入道など、日本固有という説明をされてきた数々の事象について、アジア文化のなかで起きた地域的展開の具体相として解き明かしていくことができる。そして、それらがなぜ発生するのか、どのように発生するのかについてはじめて論理的に理由を説明することができる。

３．研究の方法

平成 28 年度は、研究班の分担体制に従い日本国内で入手できる基本史資料の収集・読解を進め、そのいっぽうで、研究期間以前に予備調査がすんで、保存会との連携が取れていた韓国江陵端午祭朝奠祭から送神祭調査（5/11-12）・日本の盆行事と関係が深い済州島の燃灯祭行事の調査（3/9-12）などを実施した。

平成 29 年度は、韓国江陵端午祭迎神祭から将軍祭（5/28-30）の調査を実施した。また宮嶋純子を分担者として迎え、ベトナム宗教研究院の協力を得てハノイ郊外の寺院調査（8/25-27）を実施することができた。これらの調査を契機として学術交流が広がり、史資料の収集とその分析についての議論を予定より効率的に進捗させることが可能となった。

このような状況をうけて共同研究者らと協議し、国際学会を含む国内外の学会で発表に力を置いた。さらに国際交流による全体の効果を重視する観点から、公開研究集会の予定を前倒し

し、海外調査において交流を得た研究者を含む国内外の研究者を迎えて研究集会「アジアの信仰を考える」を実施した（2/16）。

公開研究集会においては、共同研究者らの調査研究にもとづく成果が公表するとともに、講演者にチベットの宗教事情に詳しい髙本康子氏（北海道大学）を招聘した。研究集会には、在外研究者を含むアジアの宗教の専門家も参加し、当日の議論においてはアジアの道教信仰について日本の神道学者が言及する場面もあった。

平成30年度は、成果の構築にむけて中国内モンゴル自治区の信仰と祭祀についての現地調査を実施した（6/22-27）。当該科研は、日本とアジアの魂魄観を文化グラデーションのなかで比較検討しようとする方法をとっているので、日本社会と直接接触しにくい地域において近似した宗教現象が存在するかどうかについて、複数のトレンチをいれておく必要があった。もともと長期の観察を必要とする日常の信仰について期間中に所見を得ることは容易ではなく、調査の実施は懸案となっていたが、さいわい事前の情報提供および現地随行などについて、バルガ族出身で牧民の生活文化に詳しい白布仁氏の協力をうけることができた。牧民の生活・オボ祭祀・葬送用具などについて、現地現物および聞き取り調査を実施し、課題全体にかかわる有益な所見を得た。

４．研究成果

当該課題の研究においては、日本思想の解明において、こんにちの〈日本というフレーム〉を前提として、日本と外国の共通性と差異を検出するのではなく、そのフレームをいったんはずして、グラデーションとして広がるアジア文化を俯瞰しながら、各地域の傾向を観察していく方法が有効であることが確認された。この方法は今後日本の思想および文化についての分析解明に広く応用することができると考えられる。この課題の成果はグローバリゼーションという世界的波のなかで、特定の文化が異文化を凌駕し殲滅していくような方向に陥ることなく、むしろ異文化を積極的に理解し共生していくための人文学を切り開いていくという点で、他に替えがたい意義を有している。

祖先と子々孫々の結びつきが強い社会秩序においては、子孫を祭主とできない死者や家秩序のなかで不利な立場になりやすい者は、家祭祀の外側にある宗教と結びつきやすい。死後適切な祭り方をされないたましい「無主孤魂」は、死者として生者との社会関係を確立できずに生者にとって都合の悪い現象（たたり）を起こし続けることになる。不遇なたましいたちはたたりを梃子として、武人は武神や愛国神へと進化し、水難死者は船神となり、未婚女性死者は孝女となるか山神と一体化して豊穣神となる。彼らは日本風にいえば無縁仏であり、いずれも①横難の不遇②挽回としての祭り上げ③人神化という道筋をたどる。

しかしこれらが充分に機能するためには、いっぽうで横死以外の死者が、生者と協力できる社会的人格を獲得する方法がなければならない。すなわち死者をりっぱな死者として成立させる家礼が機能していることが不可欠である。家礼が欠如した社会では、死者は「死」という現象そのものであり、身分や立場とは関係なく悪いモノと認識されている。このことはアジア社会のなかでの比較相対において、日本社会のみが死者のゆくえとしてもっぱら仏教的来世を選び取り、仏教的な死をあらゆる階層のあらゆる死の基本様式として定着させたことと深く関わっている。

アジアの極東に位置する日本と、文化展開において直接接触が乏しい地域との比較分析は重要で、思想宗教の融合や衝突と、そこに内在する為政者の保護や統制との関係において、直接接触によってではなく、条件の類似によって構造的なレベルで類似現象が起こっている。寿終死観念の欠如、墓参習俗の欠如（と成立過程）、シャーマン的民間宗教者の存立形態（宗教力獲得方法や女装）、死穢もしくは災異なす魄の遠離、家屋内祭壇の欠如（と成立）、家屋外参拝拠点（寺廟や霊山）の共有単位の形成、などについて、とくに類似現象が確認される。生者優位の此岸的な意味での普遍文化が、断続的に伝播し新旧が繰り返し接触しながらさらに変異展開する条件下の社会を分析する際には、今ある状態および過去の変化経路を観察するという方法が有効であり、この方法は当該課題だけではなく、固有論では理路が判明しなかったもろもろの事項の解明にも汎用性がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計11件）

１，池美玲、Spatial Composition of Matsunoodera ’s Sankei Mandala and Sanctity、*The Korean Society of Culture and Convergence* 41-2、pp.281-310、査読有、2019

２，佐藤文子、「書評オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』」、『近代仏教』25、pp.186-191、査読無（依頼）、2018

３，池美玲、「木浦鍮達山巡礼と信仰１－日本の観音霊場が造成された理由-」、『月刊仏光』521、pp.88-95、査読無、2018

４，池美玲、「韓国三十三観音霊場成立の一考察―韓国群山所在の東国寺をめぐって―」、『比較文化研究』32、pp.63-76、査読有、2018

５，池美玲、A Study on the Research about Donghak Conducted by Japan、*The Donghak Society* 47、pp.267-289、査読有、2018

６，池美玲、A study on the relics related to Yu Jeong in Honmyoji Temple、*The Korean Society of Culture and Convergence* 40-3、pp.267-296、査読有、2018
７，池美玲、「書評アジア仏教史のすべて－仏教史研究の総概説書－」、『韓国仏教学』83 、pp.205-216、査読無（依頼）、2017
８，池美玲、「参詣曼荼羅にみえる人物群像研究－下段の参詣形態をめぐって－」、『日本学報』112、pp.301-321、査読有、2017
９，池美玲、「大仏連半世紀に対する回顧と青年伝法の未来」、『伝法学研究』13、pp.497-530、査読有、2017
10，佐藤文子、「進化する祭と巫集団－韓国江陵端午祭の今－」、『人間文化研究所年報』12、pp.52-56、査読無、2017
11，大西和彦、「16 世紀ベトナムにおける道教の展開－『伝奇漫録』の「徐式仙婚録」を通じて」、『洞天福地研究』６、pp.38-75、査読有、2016

〔学会発表〕（計 16 件）
１，佐藤文子、「9 世紀日本における鎮国家と護国家」、日本思想史学会大会（神戸大学）、2018
２，佐藤文子、「9 世紀日本における魂魄観の転換-慰霊としての「鎮国家」思想-」、関西大学東西学術研究所研究例会（関西大学児島惟謙館）、2018、招聘講演
３，宮嶋純子、「ベトナム・バクザン省ボーダー（補陀）寺所蔵典籍に関する基礎的検討」、佛教史学会例会（大谷大学）、2018
４，宮嶋純子、「従越南佛典刊行事業看東亜佛教文化交流」、中日古代社会文化史学術研討会（広州中山大学）、2018、国際学会
５，池美玲、「参詣曼荼羅の空間構成と信仰-松尾寺参詣曼荼羅の人物図像に関して- 」、普照思想研究院研究大会、2018、招待講演
６，池美玲、「満州国芸術観形成－韓・日美術協会をめぐって－」、韓国文化融合学会学術大会、2018
７，宮嶋純子、「唐代初期の洛陽仏教　洛陽学国際シンポジウム「隋唐洛陽と東アジア」2018、国際学会
８，佐藤文子、「アジア的観点から考える聖の原義と表象」、研究集会アジアの信仰を考える、2018、当科研による公開研究会
９，宮嶋純子、「ベトナム仏教調査報告―聖地安子山を中心に―」、研究集会アジアの信仰を考える、2018　当科研による公開研究会
10，池美玲、「江陵端午祭の仏教的要素に関する一考察」、研究集会アジアの信仰を考える、2018、当科研による公開研究会
11，池美玲、「日本本妙寺所蔵松雲大師関連遺物に関する一考察」、2017、四溟大師国際学術大会、国際学会
12，宮嶋純子、「ベトナム仏教史研究における碑文史料活用の模索」、関西大学東西学術研究所研究例会、2017
13，宮嶋純子、「道宣の序文類にみる仏教史観」、第 199 回宋代史談話会、2017
14，池美玲、「韓国の山神閣考―その成立に関して―」、日本仏教綜合研究学会学術大会、2017
15，佐藤文子、「聖の原義と表象」、国際シンポジウム漢字文化と仏教（中国・浙江省七塔禅寺）、2016、国際学会
16，池美玲、「漢字文化圏における信仰と儀礼の一齣」、国際シンポジウム漢字文化と仏教（中国・浙江省七塔禅寺）、2016、国際学会

〔図書〕（計７件）
１，宮嶋純子ほか、『第 2 回日本洛陽学国際シンポジウム隋唐洛陽と東アジア　報告論文集』、pp.184 頁～193（宮嶋執筆分「唐代初期の洛陽仏教」）、明治大学東アジア石刻文物研究所、2018
２，佐藤文子、『日本古代の政治と仏教』吉川弘文館、2018、296
３，宮嶋純子ほか、『中日古代社会文化史学術研討会論文集』、pp.301-310（宮嶋執筆分（翻訳：曽昭駿）「従越南佛典刊行事業看東亜佛教文化交流」）中日古代社会文化史学術研討会、2018
４，大谷栄一・菊地暁・永岡崇編、佐藤文子ほか、『日本宗教史のキーワード』慶應義塾大学出版会、pp.259-265、2018
５，小峯和明（監修）原　克昭（編）大西和彦ほか、『【シリーズ】日本文学の展望を拓く③宗教文芸の言説と環境』、笠間書院、pp.176-194（大西執筆分「ベトナムの海神四位聖娘信仰と流寓華人」）、2017
６，小峯和明（編）大西和彦ほか、『東アジアの仏伝文学』勉誠出版、2017、pp.419-451（大西執筆分「ベトナムにおける仏教守護神の変容」）
７，仏教史学会（編）大西和彦・佐藤文子ほか、『仏教史研究ハンドブック』法蔵館、2017 pp.68-71，152-153,166-167,185

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページにてこれまでの研究内容を公開している（更新中）。
「研究活動の記録」https://fmkst.jimdo.com/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：宮嶋　純子
ローマ字氏名：MIYAJIMA,Junko
所属研究機関名：関西大学
部局名：東西学術研究所
職名：非常勤研究員
研究者番号（8 桁）：80612621

(2)研究協力者
研究協力者氏名：　池　美玲
ローマ字氏名:JI,Miryong
所属研究機関名：韓国綜合芸術大学
部局名：美術院
職名：講師

研究協力者氏名：大西　和彦
ローマ字氏名:ONISHI,Kazuhiko
所属研究機関名：ベトナム社会科学院
部局名：宗教研究院
職名：研究員

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。